

討 論

司会(井上浩一): それでは各報告に関する質疑応答に入ります。多和田先生のご報告に対して、中野さんの方から少し詳しいコメントがありましたので【コメント1参照】、まずそこから始めたいと思います。多和田先生お願いいたします。

【マレーシアのイスラム化と文化遺産】

多和田裕司: 中野先生のご質問は非常に大きな問題で、なかなか一言では答えられないのですが、マレーシアの事例に即してお答えしますと、まず、マレーシアにおけるイスラム化は、さまざまな層があるわけです。層と言ってもいいかもしれないし、要素と言ってもいいかもしれません。つまり、おっしゃられたような国際的なネットワークに乗りながら、イスラムの運動に関わっている人たちももちろんいます。それと同時に、マレーシアの国の現状を見ながら、つまりイスラム以外の人たち、特に中国系やインド系の人たちを抱えた国であるという意識のもとで、イスラムを展開していく人たちもいます。

今日の話の中で言うと、どちらかと言えば、これはあくまでも程度の問題ですが、イスラムを主張する野党側、**PAS** という政党の名前を出しましたが、それはかなりイスラムの普遍的な枠組みを現状では押し出しています。一方政府側は、彼らもイスラム教徒なのですが、かと言って、国の枠を超えた形での全面的なイスラムの活用をすると、結局これまでマレーシアが積み上げてきたものが全部崩れてしまう可能性があるのです。特に中国系はやはり植民地時代以来経済力をずっともっていて、それとの共存関係の中でマレー系イスラム教徒たちが生きてきた、そしてマレーシアの国をつくってきたという背景がありますから、あまり現状を崩したくないという考え方は、政府側にたぶんあるのではないかと思います。ただ、現状を崩さないから単純に中国系もインド系も対等な形で認めていく多文化主義かという、そうはならないわけで、つまり野党勢力がイスラムを言う限り、政府側としても、言うなればコントロールした形でのイスラム化政策を打ち出さざるを得ないのです。それが今のマレーシアの文化の状況に反映されているのではないかと、考えています。さらに、たとえば中

野先生のコメントにあったような、帝國的な状況の中でどうだとか、あるいは文化を創造していくプロセスとどのように関わっているのかということまで話がいきますと、ここで一言ではお答しにくいというのが正直なところです。

井上： 中野さんのコメントとも関わるのですが、多和田先生にお尋ねします。レジユメ最後の「5. イスラーム化の進展」のところで、そうかもしれない思いながらも、若干違和感をもちました。と申しますのは、その前の段階で、近代化というのでしょうか、ネップ（新経済政策）を導入していく、近代化が進んでいく一方で、同時にイスラム復興が進行しているのは少し違和感と言いましょうか、つまり近代化に乗り遅れた人たちが宗教復興に行く、というのが私もっていたイメージで、近代化がうまく進んでいくと宗教色が薄れていくというイメージをもっていたのですが、マレーシアの場合はそれがそうはならないということなのでしょうか。少し気になりましたので。

多和田： 今、おっしゃられたような、近代化や経済発展等は宗教と反比例するのではないかということは、ずっと言われていることで、マレーシアに限らず世界規模で言えるかと思いますが、特にイスラムの場合は近代化・経済発展とイスラム復興とは必ずしも相反するものではないようです。レジユメでも書いておきましたが、マレーシアのイスラム復興運動を担っていた人たちは、都市中間層、つまり経済発展によって新たに豊かになって、先ほど中野先生のコメントにもありましたが、国際的な情報に接することができるような高等教育を受けた人たちというのが、リーダーシップをとってやっていくという傾向ですので、経済発展したから復興する、しないというのは、今おっしゃられたような形での連動性はないかと思えます。

ただ、また別の連動の仕方として、これはマレーシア的な事情だと思うのですが、最後のほうは時間がなく早口で言ってしまいました。従来マレー系の人たちは経済力が低かったのです。それに対して、政府は新経済政策によって強引に経済力を引き上げるという政策を70年代からとり始めました。80年代はそれが結実した時期で、かなり豊かになってきました。マレー系が豊かになったことによって、いったい何が起こったのかと言うと、実はマレー系内部での権益争いがものすごく強く出るようになったのです。王族層に代表されるような伝統的な支配層に対して、マハティールに代表されるような、新たな経済発展で力をつけていった新興層みたいな感じでの対立関係は激しくなる。対立が激しくなったときに、両サイドが使うのがイスラムなのです。つまり、自分たちの立場、自分たちの言っていること、

政策はイスラム的に正しいのだということを全面に出しながら、相争うということがさまざまな場面で観察されます。それによって、イスラムにまつわる言説、あるいはイスラムを表現するようないろいろな文化的な仕組みであるとか、それがものすごく数が増えてきたというのが、80年代後半からのマレーシアの状況であり、イスラム化ということです。

ですから、マレーシアに限って言うと、あるいはもう少し一般的に言ってもいいかもしれませんが、経済発展とイスラム化、イスラム復興は、矛盾するものではないということになるかと思います。

井上： よく理解できました。ありがとうございました。

【釜山・上海の歴史遺産と市民の歴史意識】

森 隆男： 関西大学文学部の森と申します。先生方のお話を非常におもしろく拝聴いたしました。とくに岸本先生の釜山の事例をおもしろく聞かせていただきました。ご報告のなかで、釜山が歴史的に豊かな遺産をもっているということを、私も正直言って、初めて知った部分があるわけですが、こうした歴史遺産を釜山の市民の方はどうにとらえているのでしょうか。とくに私が気になりますのは、壬辰倭乱であるとか、倭館の存在です。そういうものを市民はどうにとらえられているのか、お教えてください。

もう1点、そのような歴史遺産を活かしたイベントは実際行われているのでしょうか。そのあたりのことを教えていただけたら有り難いと思います。

岸本直文： 市民の意識については、周りの人たちにきちんと聞いたことがないので、あまり確かなことはわからないのですが、釜山博物館の展示を見ても、赤裸々にあったことは事実として書いてあるのですが、そのあとには朝鮮通信使のことも出てきて、展示としてはわりと友好関係を押し出したような形でして、何度かにわたる日本人の蛮行を、あからさまに批判的な形での展示はあまりしていないように思いました。

倭館につきましては、市街地ということもあって、記念碑が建っている程度です。倭城については、はっきり言いますと、看板も立っていませんし、取り扱い上は少し差があり、まだまだ時間はかかるという気がします。

あとは遺跡の場を使ったイベントについては、すみません、はっきり情報を仕入れていませんので、お答えしかねます。

井上： 私は西洋史で門外漢なのですが、国際日本文化研究センターで共同研究をしていると

きに、韓国の方がおられて、倭城の研究をしたいとおっしゃっていました。その後どうなっているのかわかりませんが、数年前にその方からお聞きした限りでは、倭城は無視されているので、日本の研究者と共同研究をしたいと強調しておられました。

山崎覚士： 大阪市大 COE 研究員の山崎です。去年、上海に半年間滞在させてもらった者です。別に難しい話はできませんので、簡単なことだけ少し補足させていただきます。

佐藤先生にいただいたレジュメの右側に「観光地の活用」があり、そこから豫園、外灘、新天地とありまして、その下が衡山路となっていますが、この衡山路と次の淮海路は、フランスの租界地になります。その下の多倫路は日本租界地です。その「淮海路」の上のあたりがイギリスの租界地になります。

新天地のスライドを見せていただいたときに、庶民の家がどんどん壊されていっているというお話がありました。あれは新天地近辺だけに限るのではなく、豫園という所がありますが、豫園はもともと清代に県が置かれたときに、お城の城壁がぐるっとまわっていて、その中に存在する庭園になるのですが、その宮城の中の庶民が住んでいる古い家をすべて壊している最中です。現地の人に話を聞きますと、強制移住をさせられて、上海郊外に住まわされて工場で働かされるという状況で、私が滞在している半年間の間でも、すぐ町の景観が変わってしまうという、急ピッチな状況にあるということを付け加えさせていただきます。

あともう一つ言わせていただければ、朱家角という水郷、これは「江南六鎮」と向こうでは言っておりまして、六つ古鎮が存在して、それを開放してしているわけですが、朱家角は確か江沢民か誰かの政治家の故郷になっていまして、かなり資本が落ちております。ですから、そういうものを使ってかなり町並みを変えているというのが現状です。

一方の烏鎮はリニューアルをしたのかもしれませんが。私が去年1、2回訪れた折りにはかなり整備はされているのですが、整備の仕方はそのまま町並みを残している状況で、烏鎮の中は一つの町なのですが、電線は通っていません。全部地中に埋めています。六鎮の中で、烏鎮が現在のところ、極めて昔の町並みを残すいいテーマパークになっているのではないかと、私は見えています。

一方、朱家角やほか有名な周荘は電線をばんばん走らせていて、景観をかなり損なっているという状況です。

佐藤 隆： 御指摘いただいた点につきましては、報告書を執筆する際に参考にさせていただきます。ありがとうございました。

【イベントと歴史学】

仁木 宏：大阪市立大学の仁木です。北川先生の今日のお話はたいへんおもしろく拝聴いたしました。どうしても我々歴史の研究者が、歴史遺産をどのように活用するかとか、都市文化のあり方に結びつけるかを考える場合、佐藤先生のご報告や岸本先生のご報告など、博物館の中身を充実するか、現場に設置されている、遺跡の説明板を目立つようにするか、そこまでしか発想ができないのです。それをイベントという形でおそらく何百倍、何千倍という形で広く多くの人に知らしめるというのは、我々にはなかなか発想できないような新しい手法だと思います。私もいくつか別の町ですが、歴史遺産を町づくりに活かさないかという審議会などに関わっておりますので、本日のご報告はたいへん大きな動機づけ、参考になりました。

しかし、こういう話をすると、北川先生から保守的な歴史家だと言われるかもしれませんが、やはり少し難しいというか、問題点もなきにしもあらずかと思いました。たとえば、今日ご紹介された伝統芸能は、必ずしも大阪とは関係のないものではないかということです。本来大阪がもっている伝統芸能では、上方講談も入っていますが、なかなかそれだけでは難しかったのだろうかということと、はたしてそういう形ですることが都市文化の新しい創造と言えるのかということ、いわゆる保守的に（笑い）思ってしまいました。それがひとつです。それに対してご反論があればお聞かせいただきたいのです。

それとともに、もちろん北川先生ご自身が十分考えていらっしゃると思うのですが、広く何千という人に訴えかけるという意味で、これはこれはたいへん大きなことで、それをもとに最後にご紹介がありましたが、**NPO** が立ち上がっている意味も十分わかっているつもりなのですが、しかしやはり一方でこういうイベントの核、基礎になるような研究や、博物館におけるより学術的な展示など、そのようなものに一方で還っていく形も、たとえば予算措置も含めて確保していかなければ、きつい言い方になって申し訳ないですが、単なるイベントに陥ってしまう危険性もあると思うのです。そのへんの回路というか、こういうイベントの成功をどのように学問的なものにもっていくか、たとえば大阪市なら大阪市の施策として、歴史博物館や何らかの出版物になると思いますが、どのような点で回路を考えていったらいいとお考えなのか、その2点を北川先生に教えていただければと思いました。

北川 央： 1点目の芸能の件ですが、いちおう大阪との関係づけはきちんとやっているつもりです。確かに、大阪に根ざした伝統芸能ばかりを1回目にもってきたわけではないのです

が、万歳にしろ大神樂にしろ、かつて江戸時代には大坂にもこういう芸能が来ていたわけです。それが近代以降になって来なくなって失われてしまいました。失われたからこそ、かつてこういう芸能が行なわれていたということ、大阪の人々にもぜひ知っていただきたいと思ったんです。1回目は、たしかに仁木先生がおっしゃったように、上方講談を除くと、大阪に根ざした芸能を演じていただいたわけではありませんが、その後は、大阪や大阪城とゆかりのある地域からわざわざ来てもらって郷土芸能・伝統芸能を演じてもらうこととあわせて、地元大阪の芸能もご覧いただけるよう心がけております。たとえば、今年の夏の「オーサカキング」では、生國魂神社のまくら太鼓であるとか獅子舞、玉造稻荷神社のだんじり囃子などがそうです。1点目のご質問についてはそういうことでよろしいでしょうか。

もう1点の単なるイベントに終わりはしないかという懸念ですが、私自身はこれを単なるイベントだとは考えていなくて、最初の秋ブランド「大阪歴史三景」のところでレジュメにも書きましたように、この中の「大阪城天守閣のテーマ展」をいちばん軸に据えてほかのイベント展開を考えました。また、今年の秋ですと、難波宮跡が発掘されて50周年という記念の年でしたので、そうしたテーマとかかわらせて歴史シンポジウムを開催しましたし、大阪歴史博物館の特別展「古代都市誕生」も、「大阪歴史三景」のパンフレットの中で紹介させていただいたりしました。そうすることで、ただ単に展覧会を開催するよりもはるかに広く、ずっとずっと多くの方々に展覧会の情報が伝わります。イベントとからませるということは、学術的にきちんとした成果を盛り込んだ展覧会の情報を、より遠くまで伝えるために、遠心力をつける作業だと、私は考えています。

予算措置的なことは、私は大阪市の施策や予算を決定できる立場にないので何とも言えませんが、少なくとも大阪城天守閣に関して言いますと、こういった歴史・文化が、大阪の町づくりや都市としての魅力を情報発信していく際に、たいへん重要だということは、イベントの成功を通じて局の幹部もかなり認識するようになってきましたし、予算的にもきちっと確保が続いています。そして、それが次なる学問的成果を生み出す母体としても機能していると思っています。

司会(井上): イベントと学問・研究というなかなか難しい問題ですが、関連して佐藤先生のほうから何かコメントをいただけるでしょうか。

佐藤: 近くに建っている関係で、うちの大阪歴史博物館の集客に関しても、やはり大阪城がにぎわうことは非常に大事なことなので、一緒にやらせていただく機会が多いですが、イベ

ントは有り難いと思っています。

別に申し合わせたわけではないのですが、イベントに関する考え方について申しますと、やはり結果を出すということが、役所の中では大事なことだと、最近ひしひしと感じております。そういう中で学問的なレベルを上げていくというのが、これからとる道ではないかと思っています。別に入れればいいとか、イベントだけでできればいいということではなく、その基礎になるきちんとした学問は大事だと思いますが、その一方で人が集まるのがどれだけ力があるかということ、最近非常に感じています。

【博物館の情報発信】

函師宣忠： COE 研究員の函師と言います。たいへん興味深く拝聴させていただきました。今までのお話をうかがっていると、何を文化財とみなすのか、何を歴史遺産と判断するのかという点に、各都市の特徴が表れているとの感想をもちました。この点につきましては改めて述べさせていただく機会もあろうかと思います【コメント2参照】

佐藤先生におうかがいしたいのですが、文化財を保護していくことと合わせて、おそらく博物館にはそうしたものを人々に伝えていくという役割があるかと思っています。これは先ほどのイベントとも関わるのですが、人々に伝えるという点で博物館はメディアとしての機能を果たしうるのではないかと考えるのですが、実際に、大阪歴史博物館では文化財に関して、人々にどういった問題をどのようにとらえてもらうのか、どのように伝えるという行為を行っているのか、という点について教えていただければと思います。

佐藤： 非常に難しいご質問なのですが、まず、大阪市内を中心にしてはいますが、どのような展示、テーマでこういうものを見たいと考えたときに、どこに行けばいいのかというネットワーク的なものをどこかがきちんとしないといけない。大阪歴史博物館としては、ひとつにはそういう案内、広報やネットワークのようなものの表示はしています。

あと、広く知らしめていくということですが、いろいろなレベルで知りたいという方々がいらっしゃいます。初歩的な、入門的なところでいろいろな興味をもっている人、それからかなりつつこんで学術的に高いレベルのところを聞かないと満足されない方など、いろいろいらっしゃいますので、そういう中で、たとえば一般にはわかりやすいパネル、表示を心がけるということ、それからもう少し詳しく知りたい人には、こういう講演会や見学会を設けますのでそういう所に参加してくださいなど、レベルの違いに対応することも大事かと考え

ています。

大村拓生： COE 研究員というよりも、大阪市立扇町総合高等学校で大阪学を教えています大村と申します。たまたま2年前からそういう科目を担当することになったのですが、ただ一銭もお金が出ないのです。そういう事情で、生徒を外に連れ出すのはなかなか大変だという事情もあって……、何が言いたいのかと申しますと、いろいろイベントをやっていくなどさまざまな方法があると思うのですが、訪れられない方に対する発信方法も必要かと思い、発言させていただいています。

と申しますのは、大阪歴史博物館のホームページはほとんど何のコンテンツもないのでありまして、大阪城天守閣もあまりないのです。博物館によってはかなり先進的な所と、何のコンテンツも出さない所の二通りあると思うのですが、全部見せる必要はないと思うのですが、いろいろな形で発信をしていくということが必要ではないでしょうか。

大阪歴史博物館はいわゆる内部撮影自由というコンセプトでやられていて、それはそれでいいことだと思うのですが、それとともに、そういうところを外部に見せる方法もいろいろな形で考える必要があるのかと思います。

確かに画像という形で発信をすると、先ほどから問題となっていますようなイベントと同じく、非常にインパクトが強いので、それが一人歩きしてしまう危険性がないわけではないのですが、そういう方法も歴史を知らせる方法としては、今日の報告も全部パワーポイントを使われていましたが、画像で見せるという形が必要ではないかと思い、発言をさせていただきました。

北川： 大阪城天守閣のホームページについてはご指摘の通りで、たいへん不十分な内容になっているのはよく承知しております。できるだけ充実させたいと思っはいますが、現実的に今の人手では難しいという面もあります。加えて、ホームページ上に画像を出していくということに関しては、いろいろと難しい問題もあります。大阪歴史博物館の方ではそのへんを上手にクリアされたのかもしれませんが、大阪城天守閣は基本的に実物資料の展示を行なっていて、その中にはたくさんの寄託品、つまり個人や寺社などからお預かりしている資料があり、それらについては、たとえば館内の撮影ひとつをとっても所蔵者の承諾が必要となります。インターネットの普及に法整備が追いついていないという状況がありますが、今後はさらにそうした権利関係が厳しくなっていくことは間違いありませんから、よりいっそう難しい問題に直面することになっていくのではないかと思います。ホームページ上での画像

公開というと簡単に聞こえますが、なかなか難しい問題が横たわっています。また、さきほども申しあげましたように、大阪城天守閣では実物展示を心がけていますので、文化財保護の観点から、2ヶ月に1度は全面的に展示替えをしております。この展示替えにホームページの内容更新がなかなか追いつかないというのも実情です。固定した常設展示の館なら、いったん作ったホームページをそのまま長く使えるのですが、それはそれで展示内容の変わらぬ館にリピーターは来ませんし、展示よりもホームページの内容充実を優先させるというのも、全くの本末転倒です。以上のような理由がいろいろとあるわけですが、やりたい、やらなければならないという思いと、非常に難しい現実の間でさいなまれているのが実際のところですよ。

佐藤： コンテンツがないというのは、結局、館内の内容が外へ出ていないということなのではないでしょうか。要は、パソコンの前において館内にいるような形で見えないとおっしゃっているのでしょうか。としましたら、うちではそこまでは行けていないというのが現状だということしかお答えできません。その時その時の情報については、できるだけ新しいものを入れるというのはできていると思います。ただ、そういう館内の全体像までは、ご希望はありましても、なかなか手が回っていないというか、そこまで考えていないという状況です。ただ、それが可能になったからと言って、そういう形で全部見せる状況になるかどうかは、これはまた全体で方向を考えないといけないことですから、それは営業全体の中でどうするかということだと思います。今は答えにくいということで、お許してください。

司会(井上)： ホームページでの情報発信というのは、**COE**でもかなり言われておまして、文部科学省の評価でもどれくらいホームページを充実させているか、特に英文でホームページを充実させて海外に情報発信をしているかというのが、評価の重要な要素になっているようです。ただ、我々とは違って博物館ですと、全部情報発信してしまうと、誰も来てくれないうのではないかという気もするのですが、これは冗談ですが。

【都市文化創造へ向けて】

仁木： 昨年の報告集のまえがきで井上先生が書いていらした文章を読み直して、ひとつは北川先生への質問ですが、「歴史遺産と都市文化創造」のプロジェクトの目標といたしましては、海外の事例なども集めることによって、最終的には大阪市の都市文化創造にどのように寄与できるかという課題に留意していかなければいけないと、我々は考えているのです

が、まだ少し距離があるのかという気がいたしますが。たとえば北川先生から見られて、今日のような議論、あるいはもう少し広く大阪市が設置している大阪市立大学における都市についての研究が、具体的に大阪市の施策なりにどのような形で寄与できる可能性があるのか、もしお気づきの点や、このようなことをしてみたらどうか、というご提言などいただけないかというのが1点です。

もうひとつは、プロジェクトの代表である井上先生に少しお聞きしたいと思います。このような場で内部の議論をするのもなんではありますが、具体的に申しますと、昨年、今年と2回シンポジウムが続いてきたわけですが、このようなシンポジウムの内容を実際に大学関係者としてどのような形で今後、このプロジェクトの継続の問題も含めて、活かしていくような方策をとろうと考えているのか。これは内部でもう少し話さないといけないことなのですが、もし井上先生のほうでお考えがありましたら、お聞かせ願いたいと思います。

司会(井上): 核心的な議論になってきました。まず第1点について、北川先生、あるいは今日は上海のほうをお話しいただきましたが、大阪の博物館ですので、佐藤先生、お二人にそれぞれお考えをお聞かせいただきたいと思います。

北川: まず、大阪市の博物館施設の状況に関して言いますと、大阪歴史博物館をはじめ、施設の数もたくさんあり、それぞれに展示の中身も充実し、施設的な面では非常に完備されてきているという気はします。ただ、今日の他のご報告についても感じたことなんですが、私は、施設としての整備と、それを誰がどのように利用しているのかは全く別の問題だと思っているのです。

たとえば、私も博物館の学芸員として常々たいへん残念に思っているのは、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館です。非常にたくさんの共同研究も立ち上げられて、分厚い報告書もたくさん出ているわけです。研究機能という面では確かに優れたものをもっておられるとは思いますが、博物館施設全体の機能という面で見ると、立地条件はあるにせよ、とにかく観客がいないんです。利用者が少ないわけです。国立歴史民俗博物館の方がおっしゃるには、展示ケース沿いにずっと歩いていくと総延長2キロを超えるらしいのですが、以前私が行ったとき、どれくらいの人がどういう見方をしているのだろうかと思ってケースづたいにゆくりと歩いて行ったところ、驚いたことに、結局最後まで1人の観客とも出会いませんでした。歴史学界が英知を集めて作り出したはずの博物館がまるっきり受け入れられていない。たまたま私が行った日の、私がいた時間帯だけだったのかもしれませんが、私にはそのよう

に感じられました。ハードとしての施設の整備と研究活動の充実、それと利用者の問題が完全に乖離しているという恐るべき事実を見たように思いました。私にはそれが非常に残念でならなかったのです。

今日の報告で言いたかったこともそういうことと絡むのですが、私は研究者の一つの責務として、歴史・文化財に対する関心を喚起するというのも、それはそれで研究と同じくらい大切に、重要な仕事ではないかと思っています。一般の方々に、歴史に興味をもってもらう入口部分に研究者が関与できていないんです。それが私には非常に残念なんです。私は、博物館もそういう入口としての機能を果たすべきだ、果たさなければならないと思っています。私が今日お話ししたイベントなどでも、そういう入口としての機能を果たしたい、入口を準備したいという思いでやっているのですが、今日のすべてのご報告に関して言いますと、やっぱりその部分がわからないのです。このような遺産があります、このように整備されています、というのはわかるのですが、そこから先が見えてこなかったという気がします。たいへん立派な博物館施設があり、史跡がきちんと整備されていても、そこを活用している人がどれだけいるのか、それを問題にしないと、せっかく整備した史跡もやがて荒れ果て、忘れられていくのではないかと、立派な博物館施設も観覧者がいないとなると、不要論が渦巻き、結局へ閉館に追い込まれるという憂き目を見はしないか、たいへん不安にかられます。史跡・文化財などを長い目で見たとき、一時的な整備のすばらしさや施設の立派さよりも、それらの重要性が市民・国民の間でどれだけ認識されているかということの方がはるかに大事です。ですから、ぜひ利用者という点にも、目を配っていただきたいと思います。

大阪市立大学に何を期待するかという非常に難しい問いかけもあったんですが、行政の中にいますと、大学の先生は空中戦的なことだけ言っていればいいからいいよね、といった声をよく聞きます。「歴史遺産と都市文化創造」とありますが、私は今回、報告のご依頼をいただいた際に、実はそのへんにたいへん興味をもちました。今度の研究がこれまでのいろいろな研究と同じように、たとえば報告書を作ることが成果だということで終わるのか、あるいは、これを現実の大阪市の行政や施策に本気で反映していこうと努力されるのかどうかということ。後者であることを、私は大いに期待しています。

私自身、施策そのものにどこまで関わっているかわかりませんが、少なくとも先ほどから言っていますように、私は私の手がけているイベントを単なるイベントだとは考えていません。根っこのところにきちんとした学問的なベースをもっているし、イベントの随所にその

ことはあらわれていると自負しています。たとえば「歴史ウォーク」というイベントについて言うと、参加者の方々にただ単にコースを歩いてもらうのではなくて、各ポイントに私ども大阪城天守閣の学芸員や大阪歴史博物館の学芸員が立ち、それぞれの史跡や文化財についてきちんとした学問的成果に基づいた解説を行なうよう、手当てをしています。そうすることで、たいへん地道ではありますが、研究の成果なども市民の方々に直接還元できるし、ひいてはそれが歴史遺産を踏まえた町づくりにつながり、いつの日か結実するはず、そう考えてイベントをやっているのです。

このCOEプログラムについても、報告書を出すことが成果で、それで終わりではなく、「歴史遺産と都市文化創造」というタイトルに違わず、本当の意味での都市文化創造に向けて、実際に寄与するところまで、ぜひとも責任をもってやっていただきたいと思います。

佐藤： ご指名を受けましたので少し話させていただきます。先ほどの報告のときは時間がなかったもので、あまり詳しくお話できませんでしたが、上海の事例についていろいろ自分で見ながら、たとえばこれを大阪の町づくりにどう活かせるか、ということは頭に入れながら見たつもりなのです。

先ほど岸本さんが釜山の歴史遺産を発表されていました。イベントについてはちょっとわからないというご回答であったかと思いますが、日本の多くの場合も、いわゆる史跡保存の方向は釜山も同じようなものだと感じました。オーソドックスな芝生を張ったりする、公園化をはかる保存ということですが、大阪ではたぶんああいうことはできない、認められないと思います。現実に難波宮を今、公園として保存していますが、通りかかる方の声を聞いていますと、広い土地を遊ばせていてもったいないねということもけっこう聞きます。ここは何をしているのだろうということですね。そういう中で、ここで遺跡を保存して何をするかということもやはり大事です。それをイベントという形で活用するのも一つです。

たとえば、私がお客さんを連れて難波宮の公園まで行くとき、大極殿の上に乗って、空間の広がりを見てもらいます。これだけの空間の中でどんなことが繰り広げられたのかをイメージしてください。それで具体的なイメージ、具体的な物については、ここから見えている歴史博物館の中にあります。こういう中で、遺跡と博物館が補完関係にあるのだと理解してもらって、ここでは空間の広がりというものを実感してください。この遺跡がなくなったら、もう一生わかりません、金輪際わからないものだからここで見てくださいという形で、歴史をイメージしてもらおう一つの方法として使っています。

そのような活用の方法があるかと思いつつ、上海の場合は、やはりお客を入れることが基本になっていると思いました。実際に発掘をしている新石器時代の遺跡などは、発掘はしていますが、あと整備されたというか、どこにどうあるのかはなかなか説明しても答えてもらえない状況で、ひょっとしたらあるのかもしれませんが、あまり人が訪れる形になっていないです。やはり水郷のような所に力点が置かれる。あるいは建造物や町並みを改造して、そこをスポットにしていくという形です。

これが大阪で同じようなことがとれるかという、どうかかわからないです。ご質問に合うかどうかかわからないですが、大阪でも大正・昭和初期の建築物がけっこうあって、それは有機的なつながりは現状ではないのですが、たとえばうちの博物館では建築史が中心になって建築史探偵団という見学会をしています。募集すると、マニアックと言うと怒られますが、そういう会でも毎回 50 人くらい集まってもらいますが、そういう中で見て歩くことによって、こことここをつないでいくというような一つの役割を果たしているのではと思います。

あまり答えになっていませんが、そういうことを考えながら、釜山のスライドを見ておりました。

多和田： 先ほどの北川先生のお話を受けてということになるのですが、つまり、研究者の側から文化創造に関与するということについてですが、これは歴史的な文化財や文化と、私がやっております同時代的な異文化とで若干違いがあるのかもしれませんが。その上で聞いていただきたいのですが、たとえば、文化創造というところで、マレーシアの、いわゆるマレー系の文化を紹介するというのを考えた場合に、先ほど映像で写していましたような民族衣装を紹介する、あるいは家の形を紹介するなど、たくさん並べてアジアの多様な文化を紹介することが、一般的に人類学などでは期待される部分が多いのです。ただ、発表の中でも言いましたように、それをやることによって見えないもの、見えなくなるものがたくさん出てくるわけです。民族衣装や伝統的な家屋などは、確かにマレーシアのマレー文化の一断面ではあるのですが、それを紹介することによって、単純なところでは、途中で言いましたが、ファミコンをしている子どもたちの姿は見えなくなります。距離が遠ければ遠いほど、つまり我々がマレーシア・マレー社会を知らなければ知らないほど、そこで展示・紹介されたものが一人歩きしていきますから、ますます異文化に対してのある方向づけられた見方しかできなくなってしまう危険性もあります。

それからもう少し深いところでは、発表ですって言ってきましたように、ある一つの文化

を表象することによって、そうではない、非常に多文化な状況にある所で、そうではない表
象されない文化を担っている人たち、あるいはそこで暮らしている人たちの姿も見えなくな
るし、同時に抑圧してしまうことになる。もっと言えば、多文化状況が、先ほど少しまたお
話がありましたが、たとえば文化産業などに流れていってしまって、資本主義に取り込まれ
ていくという可能性もあります。

そういう現状を前にしたときに、単純に研究者が何か文化創造に関われるかということに
なるとお話はわかるのですが、どうしてもそれをするためには、いろいろなことを言わなく
てはならない、それこそマレーシアのことを1から10まで詳しく言わないと文化の紹介な
どできないだろうという感じになってしまうのです。ですから、なかなか人類学的な立場か
ら言うと、文化創造への関与というのはすばらしい目標だとは思いますが、現実的には非常
に難しい問題がたくさんあるというようなことを考えています。

井上: 一応プロジェクトの責任者をしていますので、私も一言答えないといけないのですが、
多和田先生もおっしゃるように難しい質問ですね。**COE** 全体のタイトルが「都市文化創造
のための人文科学的研究」ということで、それにいちばん即した企画がこの「歴史遺産と都
市文化創造」だと自負しているのですが、非常に短絡的に、研究からすぐ「都市文化創造」
へ行くというのは、やはり問題があると私は思っています。

もちろん、**COE** の研究員も事業推進担当者も含めて全員で考えていかないといけない問題
なので、単独で答えるのはやや僭越なのですが、私自身は少し慎重に問題を進めていかな
くはないと考えています。昨年度、第1回のシンポジウムをしたときは、漠然とした感
じで、都市文化創造もイメージとして見えていなかったのですが、いろいろな人が集まって
議論をしていく中で、都市文化創造における博物館の問題が出てきました。今年度はそれ
を受けて、大阪歴史博物館、大阪城天守閣のお二人の先生にも来ていただくという形で、問題
を絞り込んで具体化させていこうとしています。次は、今日のご報告や討論を踏まえて、ど
ういう形で成果を大阪市に還元していくかを考えていきたいと思えます。このようにゆっく
り進めてゆくなかで方向性を探りたい、あまり短絡的に結論を出そうというのは無理だとし
か、今の段階で言えませんので、今日の議論を踏まえて、もう少し事業推進担当者や **COE**
研究員、事業推進協力者、さらに今日ご参加いただいた方、前回ご参加いただいた方々も含
めて、考えていきたいと思っているところです。回答になっていませんか、すみません。仁
木先生も考えてください。(笑い)

【まとめに代えて】

司会(井上): 残り時間もわずかとなりましたので、今日ご報告いただいた先生方にお一人ずつ総括、まとめ、感想をお話いただいて終わりにしたいと思います。報告の順で、佐藤先生からお願いします。

佐藤: 最初にお話した通り、上海の専門家ではありませんので、ご専門の山崎さんが来ておられたのに、恥ずかしい話を聞かせてしまったと思っております。

これは細かいことで、実際にこのプログラムとどこまで関連するのかわからないのですが、今回の調査の中で、上海市は歴史博物館の新館を建てるということで、その建設計画の中心となっておられる方とお会いしていろいろ話をいたしました。そういう中で、先ほども少し言いましたが、たとえばうちの博物館と連携して何かできないかという話が出てくるかもしれないという状況です。

あと、たとえば志丹苑遺跡についても、遺跡をそのまま残してそれが見えるような博物館を作りたいという構想がありますが、現状では私どもの博物館で、難波宮遺跡を残して一般公開している所があります。このようなノウハウ、ある意味で悪い見本のようなところもあるのですが、そういうところも含めていろいろ情報提供ができると思ったりしています。これからも上海博物館とは関係を保っていきたいところですし、いろいろな人とのつながりができたというのが有り難かったと思っています。そういう中で、たとえば新しい博物館に関して申しますと、交通アクセスや周囲の環境の問題など、いろいろあると思うのですが、そういうことを考えていく中で、逆に今の大阪の中や、もうどうにもならない部分はあることはあるのですが、たとえばうちの博物館の周りの環境など、そういうところにフィードバックさせていければいいかと考えています。

岸本: 報告の中でもお話しましたが、歴史遺産をまず見せるしかけをしていくという点については、今まさに盛んに進めているところだということを、ひしひしと感じました。

今日は全然取り上げませんでしたが、無形文化財の指定もかなり多いのです。民族的な踊りや歌舞など、そういうものがそれぞれ地域に根ざす形でたくさんあることがわかりました。

それから博物館の入りは、概して日本の場合よりも入っているという印象が強いです。ソウルの場合は当たり前かもしれませんが、中央博にしても民族博物館にしてもひしめきあうぐらい入ってたりして、地方に行ってもそこそこ入っている。あるいは、大学の博物館、大

学そのものが一般に開かれていて、かつ大学の博物館が地域の博物館という役割を果たしてきたこともあって、わりと一般の人がふらっと入ってきたり、小学生が団体で見学したりして、大学の博物館がちゃんと博物館として機能しているというのも認識しました。

それで、文化財とソフトの部分の話が話題になったのですが、何と言っても足を運んでいただくということがやはり大事だろうと。そのためにはそれなりのハード的な仕組みも必要ではないか。金井山城を取り上げましたが、必ずしもそれはお城を見に来ているわけではなく、ハイキングに来ている人が大半なのですが、しかしその人たちは足を運んで城壁を見る、城門を見るということで、お城があることをわかってくれる。それに対して歴史的な解説をいかに加えていけるのかは、まだまだこれからの課題ではないかと思います。

多和田： 自己紹介のときにも申しましたように、私のはたして「歴史遺産と都市文化創造」というところで発表する任にあるのかどうか、非常に迷っているところがあったのです。しかも COE の所属も私は B チームで、都市の実態調査をメインにしているチームに所属しておりまして、なるべくこのテーマにあうような形でまとめてみたのですが、そういう不安感を抱えながら発表させていただきました。

ただ発表した結果、またほかの先生方のお話をうかがった結果、個人的には非常に勉強になりました。どういうところが勉強になったかと申しますと、マレーシアのことをやっておりますと、あるいは人類学をずっとやっておりますと、そこの中での議論あるいは状況しか目に入らなくなるということがあって、同じ文化の取り扱い方にしても日本における文化財・文化の取り扱い方とマレーシアのそれとはかなり違います。それが違うのは、おそらく社会の状況が反映されていて、たとえばすでに国民国家的なものが成熟しているような国と、これからまだまだ内部の多様性をどういう形で整えていくかを課題にしている国との違いがそのまま文化の取り扱い、あるいは博物館の仕事というところまで関係しているのかもしれませんが、ふだん私はマレーシアのことしか見ていませんので、それとは違う視点を詳しくお聞きすることができたということで、個人的に非常に勉強になりました。どうもありがとうございました。

北川： 先ほどからいろいろ申し上げてきましたように、私自身は、歴史学という学問分野は、他の分野に比べても、研究の成果について興味をもつ人がいて、その人がより深く知ろうとした場合の受け皿は、本という媒体ひとつとっても、かなり豊富に用意されていると認識しています。その一方で、歴史や文化財に興味がない人をどのようにして振り向かせるかとい

う作業に、これまであまりにも歴史の研究者が関与できてこなかったのではないかということについて、強い不満があったわけです。

博物館に関して言いますと、最近歴史学界も博物館に目を向けてきまして、学会誌等でも展示評などがさかんに出たりしているのですが、その展示評が論文や研究書に対する書評と同じような内容、論調になっているのです。そして学芸員はそうした評価をあまりにも意識し過ぎて展示をするようになってきています。その結果、どのようなことになってきたかと言うと、やはり展示の内容が研究者や非常に高度な知識欲求のある人向けに、近年大きく傾きつつあります。私から言うと、完全に観客論が不在だとなります。私が知っているような、歴史・文化財にあまり興味のない、ごく一般の人にとっては、まったく無縁の展示が増えてきているように感じられてなりません。そういう展示について私は全てを否定するつもりは毛頭ありません。それはそれで必要だとは思いますが、先ほども言ったように、本にしても、深く高度な内容の受け皿はいろいろと用意されています。しかし、歴史や文化財について、まず最初に興味をもってもらうための装置がそういった受け皿に比べて、あまりにも不足しているのではないかと思っているのです。

繰り返しになりますが、イベントだけではなく、私は基本的にそういうところに最も力を注ぎたいと思っております。歴史学という学問が現代社会とどう関わっていくのかということについても、これからもずっと考えていきたいと思っております。今日はそういう勉強の機会を与えていただいたと思っております。

司会(井上): ありがとうございます。本日はほかの学会・研究会なども重なり、出席をいただけるはずの方にご出席いただけなかったこともあって、少し残念でしたが、報告はいずれも充実した興味深いものでしたし、質疑討論も1時間ほどしかできませんでしたが、昨年度の議論をさらに発展させて、総括的な討論へという形で進められたと思います。本日はどうもありがとうございました。(拍手)

